

幼稚園における自然体験活動の導入から、その後の展開について

学校法人早出学園 早出幼稚園 園長 荒巻太枝子

○ 自然体験活動の導入（子どもの育ちを援助する）

きっかけは、10年前・・・

年々子ども達の遊びが貧弱になることへの対策として、自然体験を園の教育活動の中心にすえることとしました。

導入にあたり、保護者へアンケート(H8)を取り、子ども達の置かれている生活環境の調査を行ったところ、保護者からは、地域公園の不備、核家族の場合は兄弟の下の子どもが乳児であると外に行けない、住宅事情により物音を立てることができない等の回答が寄せられ、本来なら歩き始めて身の回りのさまざまな環境とかかわりながら成長すべき就園前の子ども達が“泥や水とかかわって遊ぶこと、からだを思いっきり動かす”という体験が不足していることが伺えました。加えて、マスコミにより紫外線の問題（多種のUV商品が出始めた頃）や外来生物がもっている有毒性がセンセーショナルに報道された時期であり、保護者にしてみれば、自分の判断では外へ出せないような雰囲気が身の回りにありました。

そのため幼稚園の役割として、子どもが安心して泥や水とかかわれる場所、思いっきりからだを動かせる環境として幼稚園を考え、園庭の穴掘りや水溜りへの飛び込みなど普段の園生活のなかで繰り返すことのできる遊びを奨励するとともに、保護者へは感覚を刺激する遊びがなぜ必要なかを伝えました。

また、子どもの遊びを充実させるためには、人的環境として教師の役割は大きく、教師間の共有すべき教育理念と指導方法のひとつとして、ネイチャーゲームを取り入れました。その取り入れ方については、新任研修として新規採用者を「リーダー養成講座」に参加させることが、最も合理的であると考えました。

幼稚園教育においては幼稚園教育要領があり「環境」という領域において「～何より教師自らが感性を豊かに保ち、自然とその変化のすばらしさに感動することや幼児がちょっとした折に示すささやかな自然へのかかわりに共鳴していくことが大切になる～」と教師の姿勢を記していますが、個々人の自然感の違いは大きく、また現場で指導する際にも、各教師の体験の差により指導内容が大きく変わる可能性があります。

「リーダー養成講座」を体験することで園の全ての教師が同じ教育理念のもと一定の教育力を持つことが可能となりました。

これらの取り組みの効果はすぐに現れました。子ども達は、自分を取り囲む環境に敏感になり、かかわって遊ぶことを楽しむようになりました。自分で遊びが見つけれず、教師にまわりつく子どもはいなくなりました。

○子どもの文化の形成を援助する

子ども自身が意図的に匂いをかいだり、耳をそばだてる、じっと見るということを当たり前のよう

に行うようになると、大人の既成概念にとらわれない「気づき」が子ども達に見られるようになり、その「気づき」を教師が楽しむという関係ができあがりました。

そのことは、子ども達に自分たちも発信者であるという自信を与え、子ども達の遊びはより活性化され子ども同士のつながりが密接になり、子どもから子どもへ遊びが伝わったり、遊びが進化したりすることが見られるようになりました。

保護者からは「何もなくても遊ぶことができます」「子どもがこんなことを教えてくれました」「兄弟の下の子や友達とネイチャーゲームらしきものをやっています」というお話をたびたび聞くようになり、自然体験が子ども達の日常生活の中に「遊びの文化」として定着していることが伺えました。



(遊び場として園庭) ビオトープの設置

子ども達の遊びが充実してくると、さらに充実をさせたいと思うのが親心（教師も同じ！）です。しかし、当園も全国のどこにでも見られるような住宅街の中にある、施設面で言えば、ごく平均的な幼稚園です。園内にも地域にも「自然が豊富」というわけではありません。

子ども達の興味を広げるために「園庭にビオトープを・・・」と考えたとき、躊躇すべき問題点は設置にかかる費用と教師の負担の増加でした。幼稚園教育の基本は生活の基本習慣を身につけることですから、その枠を超えて、教師の管理の手に余るような施設整備はできません。安全面にも問題が生じます。その結果できたのは、小さな池でした。子ども達は「かえる池」と呼んでいます。（費用は、国庫補助を受けました）

かえる池は、その大きさから教師というよりも子ども達が管理するのに十分な大きさで、年長児の「自然のことをよくわかる子」をトップに管理グループが自然とでき、その子達を中心に、図書室で本を開いたり、生き物の情報が子ども達の間に広がったりしていきました

面白いのは、それが次の学年へと受け継がれていくことです。たとえ、教師であつてもかえる池の草を1本抜いても「なんで、抜いたの?」「かえるが困るじゃんね」と質問されます。

このことは、子ども達が池に愛着をもち、自分たちの守るべき場所として意識していることの表れではないでしょうか。

既成の遊び道具も自然物と同じような可塑性をもち、力をあわせないと運んだり作ったりできないような大型ブロックを入れました。また栽培物はその成長がわかりやすい実のなる作物や匂いのあるものへ変更しました。

これらの施設整備の考え方のベースには、やはりネイチャーゲームの教育理念があります。子ども達

の「気づき」をとらえる教師側の感性がなければできません。



（ネイチャーゲーム活動を通して広がる人とのつながり）

園の自然体験活動を充実させるために、ビオトープ管理士、カヌー指導員、自然観察指導員
地元のNPO団体など、さまざまな専門性のある方の意見を伺ったり子ども達への指導をお願い
してきましたが、これらの方々との出会いは、すべて私自身のネイチャーゲーム活動を通し
てでした。ネイチャーゲームを通じての出会いであったため、こちらの考え方や求めているもの
が相手に伝わりやすく、私自身がコーディネーターとしての役割を果たすことができました。

また、これらの園の活動は研究事業として、日本ネイチャーゲーム協会の指導や協力を得て
常に地域の幼児教育の現場へ発信すること続けてきました。このことは、自然体験が「いつでも・
どこでも・どの幼稚園でも」行われて欲しいという私の思いによります。

○子どもの社会性を援助する／家庭生活へのメッセージ

現在、当園では、自己表現がうまくできない年少期の子ども達を除いて、子どもの喧嘩に教
師が口を挟むことはほとんどありません。子ども同士で解決しています。

自分の身の回りの環境とのかかわりが充足されてくると、子ども達の行動には社会性が見られるよう
になります。ネイチャーゲームにおけるフローラーニングにおける第4段階は「感動をわかちあう」で
すが、「わかちあい」が他者への配慮、身の回りの環境への配慮となり自分自身のあり方をどうしたら良
いか判断できる（回りに適応させる）ことができるようになります。

当園を訪れた方が異口同音に言われることは、「子ども達の動きにメリハリがある」ということです。
遊ぶときは遊び、話を聞くときは聞くという態度が身についています。

（ネイチャーゲーム再検証）

これまで、ネイチャーゲームは理念を中心に取り入れ、活動そのものは異年齢活動として行ってきま
したが、子ども達にみられた効果より、再度教育課程を見直し、ネイチャーゲームを月1回の教育プロ
グラムとして、各クラス単位に導入し、再検証を始めました。

この再検証によって、年齢別（学年）による感覚や理解の発達段階がよりわかるようになり、得に年
少児には発達に合わせた教材を用意することができました。また、年間を通じてフローラーニングに沿
ってネイチャーゲームのプログラムを組むことで、これまでは「幼稚園児だから、

このくらいかな？」と思っていた第3段階、第4段階の活動がより充実し、改めてネイチャーゲームの持つ教育力に驚かされました。

(家庭生活へのメッセージ)

園の遠足や参観会において自然体験の重要性は常に話してきましたが、家庭生活において日常的に保護者が意識して自然体験をするまでにはいたらず、食育を家庭でできる自然体験と位置づけメッセージを送ることを始めました。食卓に旬を意識すること、食事作りに子どもを参加させることなどを伝えることで、毎日の暮らしの中で五感を使って食材と触れ合うことを勧めています。

○ 地域づくりの一端を担う（これから）

自然体験活動は、個々の子どもの成長（脳やからだの発育）には必要不可欠なもので、思春期の子ども達が起こす諸問題は、幼児期の体験不足によるものであるとの指摘もあり幼稚園における自然体験プログラムも「飼育栽培」から五感を刺激する活動へと変化をしつつあります。（そのことは浜松市私立幼稚園協会が2年おきに発行している研究誌の内容からも伺うことができます。）自然が人の内なる自然を育てることは幼児教育の現場にいる誰もが理解し始めています。

しかし現在の合理的な暮らしを作ったのは、豊かな自然体験をしてきたはずの先人たちであることからわかるように自然体験＝環境教育ではありません。自然体験が将来において環境問題を解決する能力（持続可能な社会を創造する）となるまでには、人と人のかかわりから自分達の地域環境を考える土壌が必要ではないでしょうか。ジョセフ＝コーネル氏がフローラーニングの第4段階を「感動のわかしあい」としたことによりその意図を感じます。

その土壌は、子ども達が成長するまで、待つわけにはいきません。現在の親世代が子どもとともに体験し、同時に子どものための生活環境を作るという意識を持たなくてはいけないのですが、この10年間にさまざまなことが子ども達、親達に降りかかりました。

○ー157、不審者の乱入、誘拐、子ども同士の殺傷事件、鳥インフルエンザ、アスベスト整備不良の遊具による事故・・・これら子どもを取り巻く事件、事故に若い保護者は敏感に反応します。今や地域公園は子ども達と若い母親にとって最も危険な場所となり、ショッピングセンターのキッズコーナーが安心できる場所になりつつあります。

また携帯電話（メール）が普及して以来、親同士のコミュニケーションはさらに希薄でお手軽になりました。根拠の無い粗悪な情報が飛び交う生活環境も出現しています。

これらの親子をとりまく社会状況に対して、かかわりかたを伝え、家族として、より良くあることを伝える幼児教育の現場は、環境教育の最前線であると言えます。

幼稚園は親にとって小学校よりも身近です。地域にも密着しています。このような条件から、今後、園の教育を地域に向けて働きかけていくことで、親同士のかかわりを深め新しい地域づくりの一端を担えればと考え現在模索し始めています。

10年前、私は子ども達のために自然体験を園の教育活動の中心にすえました。気がつく

と「自然案内人」は私たち教師ではなく、子ども達でした。

「先生、この匂いかいこみ。・・うちのバアバの畑にもおんなじ匂いのするのあったに」

「なんか、こうやってると気持ちいいに・・やってみ！」「空見てみ〜すごいらあ」

毎日子ども達の口からでてくる言葉に胸を躍らせているのは、私たちでした。この子どものもつ「自然案内人」力を親と地域に伝え、親にも子ども達のような元気なエネルギーを蓄えて欲しいと考えています。



○ネイチャーゲーム指導員のみなさんへ

幼稚園などの幼児教育現場に指導員として行くことがありましたら、ぜひ、若い先生、お母さんの力になってあげてください。幼稚園の園庭、地域・・何かひとつでもいいです。「この木素敵ですよえ」という具合に、その小さな自然を褒める（認める）ことから始めてください。何もなければ、園庭に寝っころがって空を見ましょう。これならどこでもできます。

親子の講座なら子どもをひざにいれさせて、「お母さんってあったかいねえ」「子どもって抱っこすると気持ちいいよね」とお互いの体温に気づかせてあげてください。人も自然です。

ゆっくり流れる自然のリズムを伝えてあげてください。

子ども達が対象なら、子どもの言葉に耳を傾けましょう。子どもの気持ちに共感したことを伝える最も簡単な方法は、うなづくこと、あるいは、子どもの言葉を繰り返し「そう、〜と感じたんだ」だけでかまいません。ことさら、大げさに振舞う必要もありません。難しいことをいうと分からないと心配する必要もありません。分からなければ、訂正すればいいのです。

アクティビティが途中で中断することを恐れることもありません。「ごめんね、もう一回やってみるからね。」と説明しなおしても大丈夫です。

「今の若い親は〜」「今の子ども達は〜」という批判は、とりあえず、頭の中から消して、若いお母さんの感性、子どもの感性を大いにほめ、内なる思いを表現する楽しさを味合わせてあげて欲しいと思います。

ネイチャーゲームを行うことは、将来環境のためであると同時に、人のかかわりから始める生活環境の改善だと私は考えています。